２　事業の概要と成果	
（１） プロジェクト目標の達成度（今期事業達成目標）	**上位目標**： ガザ地区において心的外傷が放置されず、適切な心理社会的ケアが提供されPTSDが予防される。 **プロジェクト目標**：ガザ地区における心理社会的ケアモデルが確立される。 （今期事業達成目標：ガザ心理社会的センターを拠点とした心理社会的ケアモデルが構築される。） ＜達成度＞ １年次に設立した「心理社会的センター」（以下、センター）を拠点に12名のファシリテーターを養成し（活動3)、教育・医療従事者64名に心理社会的ケア（以下PSC）の知識を持った人材（以下、PSOP）の育成研修を行った（活動2)。また、83名計17家族にPSCプログラム（活動4）を行なった結果、PTSDを発症した対象者はおらず、開始時一部症状が見られた対象者については、症状の改善が認められた。情報DBの整備およびPSCテキストの改訂（活動1-3,4）によってセンターの運営体制が確立されるとともに、普及促進活動（活動5）や裨益者が主体となって映画を行い（活動1-5）を行い、関係者全員がセンターの意義とPSCの必要性を認める回答をした。その結果、今期事業目標およびプロジェクト目標を達成したと判断される。また、事業が高く評価され、他ドナーの資金調達にも成功し、センターの譲渡先である提携団体が右資金の元で本事業を引き継ぐことが決定し、上位目標実現にも大きく寄与した。
（２） 活動内容	**<u>1.ガザ心理社会的ケア拠点の体制整備</u>** **1-1.ガザ心理社会的センターの設置** *→1年次に実施済み。* **1-2.センターの利活用** **① 心理社会的ケア人材とファシリテーター養成研修の実施** →活動の詳細は下記2および3に記載。 **② PSCプログラムの実施** →活動の詳細は下記2および3に記載。 **1-3.情報管理体制の整備** 対象者や研修生が抱える問題や傾向を分析しながら、スタッフやファシリテーターの経験値や主観に頼らず、常に質の高い適切なケアおよび研修を適時提供できるような体制整備を目的に、これまでケアを提供してきた対象者や研修生の情報をデータベース化した。ちょうど提携団体のデータベースを更新することになったため、本データベースもこれに含めるかたちで構築した。当初計画でも運営管理の観点から、直接裨益者の情報リスト単体ではなく、センターの統合情報システムとして機能する一元的なデータベースを目指していたため、提携団体のデータベースに統合することは持続発展性の点からも望ましい。個人情報の取り扱いについては提携団体と締結したMOUに則り適切に管理する。 **1-4. テキストの作成** これまで汎用版のテキストおよび2014年度事業で作成した簡易版のマニュアルを使用してきたが、ケアの安定的かつ持続的な質の確保と技術移転のためには、現場レベルで運用できるよう改訂が必要であったことから、ガザ地区の特性に合わせてカスタマイズした、使いやすく、実践例を多く盛り込んだ新しいテキストを作成した。ガザの状況をできるだけ正確に客観的な視点で調査分析した内容を反映させる必要があるため、一連の作業を外部コンサルタントに委託した。Survey(調査）→Draft（策定）→Pilot（実証）→Review and Modify（評価・見直し）→Finalize（完成）の手順で行い、要所で桑山専門家が同コンサルタントと打ち合わせを行い、修正を重ねながら作成した。

1-5. 映像制作を用いた「映画ワークショップ」の実施

40 分の短編映画『Magic mirror』を製作した。家族をテーマにトラウマからの回復を伝える物語となっている。裨益者（プログラム参加者および研修員）全員が参加し、演者を務め、シナリオから撮影編集まで主体となって製作を行った。桑山専門家が各段階で指導・助言を行うと共に、12 月渡航時に撮影編集指導を行なった。また裨益者でもある主演の夫婦を招き、映画ワークショップに参加したことによる心の変化について意見交換を行った。

なお、完成した映画はオンライン上で誰でも鑑賞できるよう準備中である。要容量が大きいため電子版の提出は控えるが、内容は別添事業写真および別添⑤桑山専門家報告書をご参照いただきたい。

2. PSOP 育成（センター内部での活動）

→実施状況は、以下表に（→）で記載。

＜概要＞

	2 ヶ月コース	3 ヶ月コース	4 ヶ月コース
内容	基礎的概念と、3 次元表現までを習得	2 ヶ月コース終了後に 4 次元表現（音楽）までを習得。	3 ヶ月コース終了後に 4 次元表現（映画）までを習得。
	※各単元詳細は、別添 PSC 研修概要参照。		
スケジュール	週 1 回×8 単元／1 コース×年 3 回＝計 24 回 →24 回実施。 （6 回＊4 グループ）	週 1 回×4 単元／1 コース×年 3 回＝計 12 回 →12 回実施。 （3 回＊4 グループ）	週 1 回×4 単元／1 コース×年 3 回＝計 12 回 →12 回実施。 （3 回＊4 グループ）
受講者数	10～15 人／1 グループ×2 グループ＝20～30 人／コース×年 3 回＝年間合計 60～90 人 →合計：64 人（男性 34、女性 30） ※2 グループずつ年 3 回に分けて実施予定であったが、4 グループ（16 人/グループ）同時並行での実施に変更。	8 人～10 人／1 グループ×年 3 回＝年間合計 24～30 人 →64 人全員進級。	8 人～10 人／1 グループ×年 3 回＝年間合計 24～30 人 →64 人全員進級。
対象者	学校や医療現場、地域活動現場の従事者（事業開始後選定） →医療保健分野（パレスチナ赤十字、ラファメンタルヘルスクリニック）と、教育分野（エルアマル小学校、ジェンダー教育支援プログラム）から選定。	2 ヶ月コース終了者全員	3 ヶ月コース終了者全員
指導者	現地スタッフ（弊団体ファシリテーター）6 名が 1 グループ 2 名体制で対応。		
実施場所	センター内。		
その他	受講者は、便宜上同じ学校や施設単位で集めて 1 グループとするが、個別参加も受け入れる。属性単位でまとめることで効率よく学べる一方、知識が限定的、偏向的となることから、年 1 回プログラムの最後に、全受講者が一堂に介してグループワークを行い、知識の平準化と充実化を図る。 →10 月 10 日に実施。		

3. ファシリテーター養成（センター内部での活動）

→実施状況は、以下表に（→）で記載。
＜概要＞

コース	週 1 回計 35 回／年間、12 人／1 グループ。 →受講者数：15 人（男性 4、女性 11）35 回実施。
実施要領	週始めの日曜に単元を学び、同じ単元を週後半の水曜、木曜に OJT として活動 4 の PSC プログラムに参加し（全単元ではなくピックアップして数回実施）、実践力を身につける。詳細は別添 1:Annual Activity Plan および別添 3:PSC 研修概要参照。
対象者	メンタルヘルスケアに関わる団体から選抜（事業開始後選定） →保健医療支援を専門とするガザの 4 機関から、教育、保健、MHPSS（Mental health and Psychosocial Support）いずれかのセクターで 2 年以上の勤務経験があり、心理的応急処置（Psychological First Aid ： PFA）のトレーニングを受けたことがある人材を選定。
指導者	現地スタッフ（弊団体ファシリテーター）6 名が 1 グループ 2 名体制で対応。
実施場所	センター内。

4.PSC プログラムの実施

4-1：PSC ワークショップ

→実施状況は、以下表に（→）で記載。
＜概要＞

実施要領	1）サイト A：子ども対象 2）サイト B：大人対象 A、B 共に週 1 回計 35 回／年間、8～12 人／1 グループ×2 グループ。 （計 4 グループ最大 48 人） →対象者および実施回数は以下のとおり。 （1）家族単位のクラス ①9-12 歳子ども：31 人（男子 16、女子 15） ②13-15 歳子ども：18 人（男子 9、女子 9） ③16-17 歳女子：17 人 ④38-55 歳母親：17 人 ・合計：83 人 ・実施回数：各クラス 35 回実施。 （2）聴覚障がい児のクラス ⑤9-12 歳聴覚障がい児：15 人（男子 11、女子 4） ・実施回数：12 回実施。（9 月開始で試行的に実施したため） なお、当初の計画より裨益者が倍増しているが、運営上問題はなく、毎回裨益者およびファシリテーターのモニタリングや評価を強化することで裨益者の安全確保と PSC のクオリティ確保も維持した。
対象者	サイト A：これまで対象としていなかった国境地帯に住む子どもや、身体的障害を負った子どもを想定。（事業開始後選定） サイト B：戦闘などで身体的障害を負った人や、国境地帯に住み生活が不安定な中で職業訓練を受けている女性たちなどを想定。（事業開始後選定） →家族単位での包括的な支援の必要性に鑑み、上記①～④は国境地帯の比較的貧困地域に住む同一家族から対象者選定を行った。17 家族から 83 人が参加しており、全員が父親や夫からの暴力被害経験を持つ。また、17 家族のうち、3 家族が母子家庭であり、9 家族はなんらかの社会的支援や生活保護を受けている。これに加え、15 人の聴覚障害児のクラスも設けている。
指導者	現地スタッフ（ファシリテーター）6 名が 1 グループ 2 名体制で対応。 加えて、先行事業で育成したファシリテーターの参加も検討する。人材を有効活用し、層を厚くすることで安定的なケア提供を行えるような体制構築を目指す。
実施場所	1 年次はセンター外部で実施していたが、ケア提供拠点としてセンターの機

	能を強化するため、センター内部で実施。

4-2：相互理解アクティビティ

2022 年 6 月 20 日～23 日の 4 日間実施した。上記 4-1 の通り、今年度は家族内および家族間の交流を意識した内容とし、プログラム参加者とその家族、合計 205 人が参加した。屋外の公共の場で行うサマーキャンプは、開放的になれる一方、心のつかえとなっているガザの現実と向き合わざるをえない環境下で行うため、通常のセッションに加え、自己表現力を更に高めるとともに、より大きなグループ（健常児と聴覚障がい児の交流、家族間の交流等）での共同活動を通じて他者に耳を傾け、相互理解力を高めるのに有益な機会である。またサマーキャンプには父親も参加した。今年度は家族単位で支援を行っており、一般的に男性（夫）の立場が優位とされるガザにおいて、サマーキャンプにおける父親の参加は、後半の活動に良い効果をもたらした。

＜概要＞

日程	内容	参加者
1～3 日目	**ワークショップ** [物語]家族同士で物語を作り出す [工作]描画、ペーパークラフト、凧工作、凧揚げ [音楽]歌遊び、合唱、発表会 [演劇]即興劇の制作、発表会 [スポーツ]大縄跳び、サッカーなどの球技	子ども：64 名 大人：40 名 家族：82 名 臨時スタッフ：10 名 団体スタッフ：9 名 計：205 名
4 日目	**遠足** ワークショップ会場近郊のアミューズメント施設での集団遊戯、スポーツ、語らい等	

4-3: 保護者（家族）との面談

“FamilyDay ”と称し、17 家族全てを対象に、第 1 回目を 8 月 14 日実施した。8 月 5 日～8 日に発生した空爆の直後であったため、状況や体調確認を兼ねて行った。2 回目を 10 月 10 日、3 回目は全プログラム終了後の 3 月 1 日に実施した。

4-4：最終発表会

2023 年 3 月 6 日、プログラムの集大成として実施し、保護者や学校関係者、教育省やラファ市長など政府関係者、NGO、国際機関等 243 名が来場した。

プログラムに参加した 17 家族の裨益者が各ブースを設け、プログラム内で製作した成果物（2 次元、3 次元表現）を並べ、来場者は各ブースを巡回しながら質問を投げかけ各家族が背景にあるトラウマストーリーを語るという手法で実施し、心理社会的ケアモデルの最終段階である「社会との再結合」を意識できる内容であった。（詳細は別添●桑山専門家報告書参照）

5. PSC の普及促進

5-1：関係者合同意見交換会の開催

PSC とセンターの必要性を認識してもらい、ガザへの適応と活動継続の可能性をを議論するため、社会的弱者支援を行うガザの 5 機関と、9 月 29 日、12 月 9 日に実施した。

＜出席者からの提言＞

・ガザ南部だけでなく、他の地域にも活動を拡大してほしい。
・家族単位でのケアは非常に有効。対象家族をもっと増やしてほしい。
・身体障がい児（聴覚障がい含む）と健常児を同じクラスで実施しては。
・研修生を、組織単位でなくたとえば大学生などの個人にも拡大しては。

5-2：関係機関・行政機関とのミーティング

行政関係者を含む会議を 9 月 5 日、11 月 29 日の 2 回実施した。
本ミーティングは、上記 5-1 関係者合同会議に加え、事業後のセンターの運営や、

	利活用の啓発、資金調達等について、各関係機関と意見交換を行うことを目的としており、2 年次は、センターの持続的な自立運営を見据え、1 年次の成果を踏まえて、特定の団体や機関にターゲットを絞って具体的な協議を行った。 **5-3：広報活動** **（リーフレットとホームページの作成、メディア出演）** 1 年次に作成したリーフレットを引き続きイベント会場や関係者へ配布・紹介を行ったほか、センター紹介動画も用いて関係者会議等で紹介を行った。ホームページと Facebook も随時更新し発信した。また、多くの取材を受けラジオ出演や新聞掲載を通じて、センターの周知と理解促進を図った。 **5-4：映画上映会** 2023 年 3 月 6 日、上記 4-4 最終発表会と同日開催した。
（３）達成された成果	以下、（→）で達成状況を記載。 **●期待される成果 1：** 心理社会的ケアを提供するための体制が整備される。 指標 1-1：心理社会的ケアセンターが設置される。 *→1 年次に実施済。* 指標 1-2： ① センター内で活動 2、3 の研修が計 70 回以上実施される。 →83 回実施（活動 2:48 回＋活動 3:35 回） ② センター内で活動 4 のプログラムが計 70 回以上実施される。 →152 回実施（家族単位のクラス：各 35 回＊4 クラス＝140 回＋聴覚障がい児クラス 12 回） （確認方法）利用実績→別添①Annual activityplan （確定版）の通り。 指標 1-3：ケア対象者および研修生の情報データベースが作成される。 （確認方法）新規情報データベース →作成。（別添②データベース仕様） 指標 1-4：ガザの特性に合わせた PSC テキストが作成される。 （確認方法）新規テキスト（英語、アラビア語） →作成。（別添③テキスト英語、アラビア語） 指標 1-5：映画製作に関わったスタッフ全員に習熟度テストを実施し、平均点が 70 点以上となる。また、映像制作と映像媒体が PSC の啓発ツールとして有効であることを計るため、参加者（演者と制作側）全員にアンケートを行い、75%以上が「映画制作によってトラウマと向き合うことができ、社会との再結合が意識された」と回答する。 （確認方法）習熟度テスト、アンケート →習熟度テストの平均点は 89 点であった。参加者全員のアンケートはヒアリング形式で行い、86%が「自分のアイデアや感情を表現し他の人と共有することができる力が備わった」、「トラウマやトラウマとなった出来事に向き合うことができるようになった」と回答し、目標を達成した。 **●期待される成果 2：** 心理社会的ケアの基礎的な知識を身につけた人材が養成される。 指標 2： 2 ヶ月～4 ヶ月各コースの終了時に習熟度テストを実施し、全員が 75 点以上を確保する。 （確認方法）習熟度テスト →知識テスト、能力テストともに全員が 75 点以上獲得し、目標を達成した。 **●期待される成果 3：** 心理社会的ケアの専門知識を持つファシリテーターが養成される。

	指標 3-1： コースが終了時にファシリテーター養成専用の習熟度テストを実施し、全員が 70 点以上を確保する。 （確認方法）習熟度テスト →全員が 72 点以上を獲得し、目標を達した。 指標 3-2： 現地スタッフ（弊団体ファシリテーター）がチェックリストを用いて担当する研修生の習熟度を判定し、全員が 80%以上の評価を得る。 （確認方法）評価テスト →全員が 83%以上の評価を得、目標を達成した。 指標 3-3： 研修生による本事業外での PSC 実践が 2 事例以上報告される。 （確認方法）研修生レポート→別添④の通り目標を達成した。 **●期待される成果 4：** ケア対象者の PTSD の完全発症の予防または一部発症の場合は症状が改善する。 指標 4-1-1：心の健康度を計る GHQ[1]と、ファシリテーターが観察結果や保護者、関係者らの情報を基に対象者の変化を記録する PTSD チェックをプログラム前後に実施。 ①GHQ：平均値の差を比較する t 検定において有意差を示す p 値が 0.05 以下となること。 ②PTSD：事後チェックで項目数が 1 つ以上減少。事前チェックで当てはまる項目がなかった場合は、事後チェックにおいても該当項目がなしとなること。 （確認方法）GHQ、PTSD チェックリスト →別添⑤桑山専門家報告書の通り、目標を達成した。 指標 4-1-2： ナラティブレポート[2]で、対象者の改善事例がサイト A、B それぞれ 2 事例以上報告される。 （確認方法）ファシリテーターによるナラティブレポート →別添⑥ナラティブレポートの通り、目標を達成した。 指標 4-2（活動 4-2～4 共通）： プログラムの最後に保護者および関係者全員にアンケートを実施し、75%以上が PSC プログラムが有効であったと回答する。 （確認方法）アンケート、面談記録、聞き取り調査 →アンケートはヒアリングおよびディスカッション方式で行った。 ・全員が、「社会、経済、治安など厳しい状況が続くガザで、心理社会的ストレス下で生活している中、PSC プログラムは絶好の機会であり、大変有効であった」と回答した。 ・プログラムに参加した 81%が、PSC プログラム参加後、自分の反応をコントロールする能力が高まり、アイデアや感情を表現し共有する能力が高まり、自分のための時間を見つけ、人生を楽しむことができるようになったと感じた。さらに、自尊心や自信の強化につながったと回答した。 ・子どもたちについては、92%の母親が、子どもたちが自信を持ち、考えや感情を表現できるようになり、責任感が強くなり、社会性が向上したと回答した。 ・加えて、参加者の 95%が、家族内の良好な関係の改善、対話スキルの向上、互いへの思いやりの増加、一緒に過ごす時間への配慮ができるようになったと回答し、家族単位での裨益効果も確認された。

[1] GHQ:一般健康質問紙(GeneralHealthQuestionnaire)。本事業では GHQ12 問版を桑山医師が子どもたちに合わせて改変した「Kuwayama-12」を使用し、便宜上こちらを「GHQ」と表記している。

[2] ナラティブレポート:プログラムを通して生じた変化を子どもたちの物語としてファシリテーターの視点でまとめた報告書

以下、裨益者の多数を占める母親の変化を 3 つの観点から報告する。
（１）母親のレジリエンスに対する PSC の影響
79%の母親が、プログラムによって受益者が以前苦しんでいた PTSD を克服し、母子の生活上のストレスや追求、困難な状況に対処する能力が高まったと回答した。
（２）ガザに存在するニーズと期待への合致
97%の母親が、プログラムを通じて母親と子どもが得た知識やスキルは、自分が置かれた現実とニーズに応えており、自尊心を持ち、GBV や男性社会に立ち向かう能力をサポートし、心の安定を高めてくれたと回答。また以前は他者と積極的に議論を行うことに関する能力に限界があったが、このプログラムによって、このギャップを埋めるのに必要なスキルを身につけ、周囲のコミュニティとより良い関係を築くことができ、「自分が受け入れられている」と実感できるようになったと述べた。
（３）PSC の家族レベルでの影響と効果
87%の母親が、プログラムの強みの 1 つが家族を対象に包括的に支援してくれたことだと回答。これは、家族が PSC プログラムで同じ経験をすることで、家族全体がポジティブな変化に向かっていると実感できたからだと述べた。さらに、93%の母親が、家族内の良好な関係の改善、対話スキルの向上、互いを思いやる気持ち、一緒に過ごす時間への配慮ができたと回答した。

以上の回答を以て目標を達成した。

●期待される成果 5：
心理社会的ケアへの理解が向上し、その拠点としてセンターが認知される。
指標 5-1：関係者合同会議において、70%以上が PSC への理解とセンターの必要性を示す回答をする。
（確認方法）参加者リスト、アンケート
→アンケートはヒアリングにて行い、参加者全員が PSC プログラムとセンターの存続を求める回答をし、目標を達成した。

指標 5-2：関係者との面談
・行政関係者：1 回以上
・関係機関（他の連携可能性のある機関やドナー等）：2 回以上
（確認方法）面談記録
→行政関係者を含む会議を 9 月 5 日、11 月 29 日の 2 回実施。また完成した改訂版テキストのローンチミーティングを 3 月 12 日にも実施し、目標を達成した。（別添⑦関係者面談議事録）

指標 5-3：
①リーフレットとホームページの作成
（確認方法）リーフレットおよびホームページ成果品（アラビア語、英語）
（＊2 年次に改訂した場合は、改訂版）
→リーフレットは改訂なし。ホームページはメンテナンスのみ行った。
②年 3 回以上のラジオ出演または新聞掲載
（確認方法）出演・掲載実績
→12 月 7 日、8 日に地元紙 2 社の Web 版に活動内容が掲載されたほか、12 月 7 日にケースマネージャーの Ms.Mai がラジオ番組に出演し、センターと制作した映画の紹介を行った。また最終発表会では地元 TV 局の取材が入り、当日のニュースで報道され、目標を達成した。（別添⑧メディア出演・掲載リスト）

指標 5-4：映画上映会で、参加者の 70%以上が、映画を通じて PSC への理解が深まったと回答する。

	（確認方法）アンケート →アンケートは上映会後にヒアリング方式で行い、参加者の 82%が映画を通じて、トラウマ、トラウマとなった出来事、PTSD の意味、PTSD を癒し回復力を高めるための PSC の重要性について、深く認識することができたと回答し、目標を達成した。 以上の成果から、プログラムに参加した裨益者およびその家族、研修生らの心が解放され、トラウマに向き合うレジリエンス力が備わったことが確認された。このことは、「持続可能な開発目標(SDGs)」の目標 3「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。(3.4：2030 年までに、非感染性疾患による若年死亡率を、予防や治療を通じて 3 分の 1 減少させ、精神保健及び福祉を促進する。)」および目標 16「持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する（16.1：あらゆる場所において、すべての形態の暴力及び暴力に関連する死亡率を大幅に減少させる。)」に寄与するものである。
（４）持続発展性	成果の持続発展性について、ソフト面、ハード面および資金調達の点から報告する。 ＜ソフト面＞ （１） 人材育成 １年次の活動において、ガザで PSC の必要性が高まる一方、ケア実践者の人材不足や現場関係者の知識不足が浮き彫りとなったため、２年次は、教育現場に加え、赤十字や福祉団体などの医療従事者も対象者に研修を実施した。その結果、医療現場でも通院・入院患者やリハビリを行う身体障害者らにとって PCS のニーズが高いことが確認され、赤十字からは、継続してより多くの医療従事者に研修を受けさせたいとの要望が上がった。今後はセンターを引き継いだ提携団体のエルアマルが、本事業で養成したファシリテーターを派遣するかたちで、本事業で改定したテキストを活用しながら研修を継続し、更に PSC の裾野を広げていく予定である。 （2）裨益者 各裨益者がかかえているトラウマは、家族に起因することが多く、家族単位でのケアの必要性が確認されたことから、２年次は全 17 家族から、9-13 歳の子ども、10 代の思春期の女性、18-55 歳の母親世代の GBV 被害女性を対象に家族単位で包括的なケアを行った。その結果家族関係や行動に大きな改善が見られた。また、ガザの置かれた状況や伝統的な家父長制、男性優位の価値観に起因する GBV はガザで深刻な問題となっており、GBV 被害女性へのニーズも高いことが確認された。こうしたニーズに応えていくため、活動を引き継ぐエルアマルが、GBV 被害女性へのケアを継続するとともに、家族単位でのケアを父親にも広げていく計画である。父親の参加は本活動の映画製作でも実証済みであり、高い効果が期待できる。 ＜ハード面・資金調達＞ 本事業で設立した PSC センターは譲渡先であるエルアマル社会復帰協会本部ビル内にある。エルアマルはパレスチナ自治政府および複数のドナーから資金提供を受け、本部ビルや活動拠点の維持管理や拡張を行いながら、教育・医療福祉支援を行っており、センターは引き続き PSC の拠点として活用される。また、最大の懸念であった資金調達については、OCHA（国連人道問題調整事務所）および Terredes hommes（スイスに本部を置く国際子どもの権利慈善団体）による 1 年間のプロジェクト、MDM （国際 NGO 世界の医療団）Spain による 5 年間の人道支援プロジェクトの中で、本事業を継承するかたちで PSC を実施することが決定しており、供与した資機材等についても本継続事業で活用される予定である。本事業で育成したファシリテーターや、団体スタッフの多くもいずれかのプロジェクトにアサインされ、PCS のノウハウを引き継いでいく。加えてその他ドナーや UNRWA からも高い関心が寄せられており、連携の可能性を模索中である。

	最後に、在パレスチナ日本代表部を訪問し、中島大使に事業終了の報告を行ったところ、大使より「UNRWA の病院を訪問した際、心のケアのニーズが一番高いと言われ、他ドナーもかなりこの分野への関心を持っている。ODA で心のケアを長期で支援してもらえるのは大変重要であり、今後もパレスチナへの支援をぜひ継続していただきたい」とのお言葉をいただいたこともご報告したい。